

米国 リンゴ産地は増大する気候変動の課題に直面

[FreshFruitPortal](#) 2025年1月8日

ワシントン州立大学(WSU)の調査によると、気候変動は、米国で最も重要ないくつかのリンゴ産地に大きな課題をもたらしている。

WSU Insider(同大学の学内サイト)は、研究者グループが、発芽、開花から果実の肥大、成熟、着色まで、リンゴの生育サイクルに影響を与えた40年以上(1979年~2022年)の気象条件を分析したと伝えた。

多くの産地が気候リスクの増大に直面しているが、ワシントン州ヤキマ、ミシガン州ケント、ニューヨーク州ウエインの3つの地域が最も影響を受けている。

同大学の気候学者でこの研究の著者であるディプティ・シン氏は、「我々が愛して止まないおいしいリンゴを当たり前だと思ってはいけない」と述べている。

同氏は、WSU Insider が報じた声明の中で、「生育期間中の複数の時期に気象条件が変化すると、リンゴの生産量と品質に脅威を及ぼす可能性がある。今後は、リンゴの生育の様々な段階で、全体的な悪影響を最小限に抑える適応について考えることが有用だろう」とコメントしている。

具体的には、研究者たちは、リンゴの成長に影響を与える6つのパラメーターを調査した。そのうち2つは極端で、日焼けやその他の問題を引き起こす可能性のある非常に暑い日(34°C以上)と、リンゴの着色に悪影響を与える可能性のある暖かい夜(15°C以上)というものである。

考慮されたその他の要因は、寒い日の数、「低温時間」(リンゴの木が休眠するために必要とする非常に低い気温の時間数)、春の降霜の最終日、及び成長温度日数(リンゴの成長を助長する一定の温度を超える日数)であった。

これらのパラメーターが変化すると、開花の時期が変わったり、日焼けのリスクが高まったり、またリンゴの外観と品質に影響を与えたりすることにより、リンゴの生産に悪影響を与える可能性がある。

共著者であり、同大学の樹木生理学者で、ウェナチー果樹研究普及センターでプログラミングを主導するリー・カルクシツ氏は、リンゴの木が多年生植物であることもあって課題は複雑であると指摘する。

同氏は、「様々な季節に起こることは、果樹の長期的な健康のほか、その特定の季節のリンゴの収量と生産性に影響を与える可能性がある。つまり、冬に起こることが春に起こることに影響を与え、それが今度は夏に影響を与え、そしてこのサイクルが続く」と説明した。

気候リスクの増大が予想される中、研究者らは果樹業界が適応するのを助けるための取組みを行っている。カルクシツ氏は、異常気象がリンゴとナシの作柄に与える影響を軽減することを目的とした、米国農務省の675万ドルの助成金によるプロジェクトを率いている。この複数機関の連携による取組みは、ワシントン州のリンゴ産地を始めとして全米で展開されている。

この研究は、学術誌 Environmental Research Letters に掲載された。